

史料報

第 22 号

昭和50年 3 月

「歴史資料保存利用機関連絡協議会」の組織化と今後の問題

佐久間 好 雄

(茨城県歴史館
史料部研究員)

一、成立の経過と趣旨

地方文書館については山口県文書館を皮切りとして、ここ数年来形態は異なるが、全国各地で歴史研究者を中心として、文書保存に関心をもつ人々の強力な運動を背景に、文書保存機関の設立、あるいはその機運といったものが高まりつつある。このような動きのなかで、すでに設立し数年以上の文書保存の実績をあげている機関や、発足まもなく種々の問題に当面しながら努力している機関、設立準備の機構が発足し、実際に建設事業をすすめているところ、また現在設立を検討中で、すでに出来上っている諸機関の施設等を参考に、設計がすすめられているところなど、各地域の実情によって、文書

保存に取りくんでいる姿は様々である。その上、それぞれの機関の運動のすすめ方、実績等にも、地域差と同じように差違が認められる。だがそのような差違はあっても、現在文書保存機関に勤務し、日常、文書の収集・整理、保存、調査、研究等に当たっている人々にも、また設立準備段階に携わっている人々にも、共通して当面する問題は数多いのである。

史料保存の基本法として、その制定が強く期待されている「歴史資料保存法」が、いまだに制定をみていないことは、誠に残念である。が、やがてはこの法的裏付けを求めて、史料保存運動に関係している者が、強力に制定への運動をすすめるなければならない。そのために、今それぞ

目次

- 「歴史資料保存利用機関連絡協議会」の組織化と今後の問題……佐久間好雄 (1)
- 国立史料館の史料所在調査に参加して——その反省と問題点——吉永 昭 (4)
- 所在調査報告——三州滝川家文書・丹後地方農村文書・近世史料目録…… (6)
- 所在調査——旗本家文書(その1)…… (8)
- 受贈図書…… (9)
- 新収史料紹介・集報…… (14) (16)

れの保存機関において当面している問題、たとえば保存機関の位置づけ、組織機構や運営上の問題、保存機関に勤務する専門職員の身分保障や勤務条件の問題、設立過程をめぐる諸々の問題等を、それぞれの保存機関に勤務する職員が十分認識し、共通理解をもち解決する方向での努力をしなければならぬ。さらに日常の史料取扱上の諸問題、そして今後地方文書館の史料収集の主流を占めるであろう、県庁各課の行政文書、行政資料の受入れ、整理、保存の問題等、解決をせまられている問題は少なくないのである。

従来各保存機関は、個別に連絡と情報交換を密にして、解決化への努力はしてきた。だがこれでは共通のものにはなり得ないので、当面している問題を持ち寄り、協議検討し合う学習の場を持ちたいという希望が、山口県文書館、国立史料館、神奈川県文化資料館、埼玉県文書館、千葉県文書館、茨城県歴史館に勤務する

有志の間に持ち上がり、昭和四八年夏より、比較的地理的条件に恵まれている東京近辺の諸機関の人々が、埼玉県文書館に集まって、歴史資料保存利用機関の関係者懇談会の結成について、意見交換を行った。

その結果、集まった人々が懇談会結成を確認し、それ以外の人々で、この問題に関心を有する人々の意見も広く聞くことで準備がすすめられ、第一回目の会合を埼玉県文書館で開催することに決した。かくて昭和四九年一月、懇談会開催の案内草稿が練られ、趣旨の賛同者を募って案内状の発送が行われた。

この案内状には発起人として国立公文書館、京都府立総合資料館、神奈川県文化資料館、茨城県歴史館、北海道行政資料室、岡山総合文化センター、国立史料館、山口県文書館、福井県立図書館、福島県文化センター、埼玉県文書館、東京都公文書館、千葉県文書館の有志一三人の名が連記された。各機関関係者に発送され

た案内状は、次のとおりである。

一、名称 歴史史料保存利用機関関係者懇談会（「保存機関懇談会」と略称）

二、目的・趣旨 歴史史料保存利用機関（以下「保存機関」という）の動向は、近時漸く全国的に多数の関係者の関心を高めてきている。すでに数年以上にわたって活動の実績を挙げている機関、活動開始間もない機関、設立準備機構が発足している地域、周辺で設立準備運動が進行している地域など、史料保存体制は多様であり、運動の進展度にも差異がありながら、そこには保存機関の運営、業務、あるいは準備業務に直接関わっている関係者として、共通の問題が存在していることは否定できない。

例えば今日われわれの強い関心を惹く事項としては、当面保存機関の組織機構や、運営上の諸問題、職員の身分保障や勤務条件、設立（準備）過程をめぐる諸問題等があり、日常的に生起する史料取扱業務上の諸問題（調査、収集、整理、分類、行政資料の収集、利用問題等々）にも解決を迫られている問題が

少なくない。

この会は、これらの機関の関係者が相互に自主的かつ平等の立場に立つて現在直面しているさまざまな問題点を率直に出し、討議し合うことによって共通の課題解決の方向を見出し、相互協力によって民主的な保存機関の建設、発展に寄与するための自主的な研究と懇談の場として開かれるものであると同時に、今後の恒常的な連絡・研究協議組織の設立をめざし、その準備会としての役割を持つものとして開かれるものである。

二、第一回・第二回会議の内容

第一回目の会合の案内状は、準備段階で把握した都道府県レベルの保存機関——文書館、資料館、歴史館、総合文化センター、図書館、県史編さん室等に発送した。その結果、北は北海道行政資料室から、南は沖縄県史料編集所まで、一六機関、二七名が昭和四九年三月二日、三日の両日、埼玉県文書館に参集した。当日の討議内容として予め用意されたテーマは、次のようなものであった。

1. 設立（準備過程）をめぐる諸問題

2. 組織、機構及び運営上の諸問題
3. 職員の身分保障、勤務条件等の問題について
4. 史料取扱上の問題（調査、収集、整理、分類、利用等）

5. 各層の史料保存運動との関連における位置づけの問題
6. 今後の恒常的な連絡協議組織の設立について

会議は各機関の紹介をかねてすめられ、意見交換と討議がなされた。この中で、各機関ともそれぞれ組織、職員の身分、待遇等でかなりの差違があることが明らかになったが、さてどの機関のものがより良いものであるのか、ということになると、これにも意見が集中し、なかなか結論はでなかった。とりわけ或る文書館で、職員の待遇を研究職としたら、文書の整理分類よりは、研究報告の作成に力を入れてしまい、その結果職員間に亀裂を生じたとか、文書館職員が、整理中にみつけた史料を一人占めにしてしまつて、なかなか公開することに至らなかった例など報告され、今後の文書館運営に考慮せねばならぬことなどが指摘された。

連絡協議会の組織化については、各地域における保存機関と類似機関との業務上競合の問題——例えば文

書館ないしは資料館と博物館、図書館郷土資料室、県政資料室等との関係、また設立しようとする史料保存機関協議会と、すでに設立されている都道府県行政資料連絡協議会や日本図書館協会中の郷土資料部会との関係について、活潑な意見が交わされた。各機関よりの参加といっても、その機関は一樣ではなく、文書館、図書館、行政資料室関係の人々の参加であるから、当然のことながら議論が錯綜した。しかしこの懇談会は、各機関に所属する実務担当者の、自主的な研究の場であることを確認して、この問題を次回に持越すことに決した。

第二回目の懇談会は、開館して間もない茨城県歴史館において、昭和四九年一月九・一〇日の両日行われた。出席者は一六機関、三二名で、顔ぶれはほぼ第一回目の会合と同じであったが、市段階で全国にさきがけて設置された藤沢市文書館が参加したことは注目された。二回目の会は、すでに一回行つて顔なじみになつていたせいもあるが、討議はスムーズにすすんだ。各機関の現況報告のあと、恒常的な協議会の組織化について、活潑な議論が重ねられた。

公的機関化することの是非については、公的なものにする、懇談会設立の初志が失われ、形式化するきらいがあり、自主的研究の場が保障されにくくなる、従って若し公的機関としても、あくまで自由な個人参加を建前とすべきであるという意見と、公的機関とすることによってより多くの人々に門戸を開き、継続化を図る、その弊害として考えられる形式化の問題については、分科会方式等を工夫することによって切り

抜けられるであろう、という意見とに代表されたが、大勢は公的機関として、会の発展的存続を図ろうということで一致した。そして類似機関、既存の他の協議会との関係も対立的にすすめるのではなく、個人の参加という面で、相互の摩擦を避ける方向で解決したい、ということに落着き、協議会規約の作成には、茨城等五機関が起草委員にあげられ、次の会場を山口県文書館、そのための事務局を埼玉、茨城が担当することにした。

第二日目には、この懇談会の主眼である研究発表が行われた。山口県文書館広田暢久氏の「県庁文書の収集と整理」である。広田氏の報告は山口県の公文書の収集についての問

題点、収集基準と整理方法についての実践例が報告された。このテーマについては、参加者大多数の待ち望んだテーマであり、それを土台とする研究討議が行われた。前述のように、地方文書館の生命となるものは、県庁行政文書、行政資料（刊行物類）の収集、整理であるが、これについては従来どの機関でも明確なものを示し得ないのが現状である。

三、今後の協議会のあり方

とにかく二度にわたる懇談会の開催は、各保存機関相互の連絡を密にするということと、現在保存機関に從事している者が、日常的に当面している問題について、参加者全員で研究し、討議し、解決化への歩みをはじめようという所期の目的に沿った形ですすめられ、それなりの成果をあげた。とりわけ県庁文書の収集と整理の問題は、今どの機関においても、似たりよつたりの悩みをかかえているのである。そこには行政の中での文書館、資料館がどうあるべきなのか、といったことから多くの人々の関心が寄せられている問題である。たしかに行政文書、行政資料の収集、整理等は実際にその衝に当たってみると、大変なことであ

る。近世文書の分類・整理についても、困難なことが多いが、県庁文書になると、複雑さは一層ひどいものがあり、比較にならない。だが一方、それらのことがらは大変に「やりがい」を感じさせるものでもある。役所の機構の中で、どうその機構を利用して、今後の歴史研究のために文書の保存をはかっていくのか。多くの人々は第三回目の協議会で、この問題について研究討議することを期待している。少なくとも今後何回かの協議会で討議することによって、それらの問題解決の糸口がつかめるようになるのであろう。一方地方文書館や類似施設が増えていく中で、文書保存法制定への活動も、大きなことである。協議会の運動目標の一つとして、たえず心しなければならぬことは云うまでもないことであるが、これは単に各保存機関関係職員のためだけの問題でもないし、またそれら職員の力だけでできるものでもない。多くの歴史研究者と力を合わせることによってはじめてできる性質のものである。

だがそのためには、各保存機関が当面している様々の問題について、十分なる理解、研究、対策が今最も重要である。その意味において、懇

談会が二度にわたって持たれたことは、すこぶる有意義であった。このような観点にたつて、今埼玉、茨城の事務局を中心として、公的な協議会として存続させるための、規約づくりがはじめられた。五〇年度に山口県文書館で開催される第三回目の会は、協議会として、第一回目のものであるであろう。今度は、文書館、資料館、行政資料室、図書館郷土資料室等へ案内状も発せられるから、参加機関、参加人員ともに一層の増加をみることであろう。数が多くなることによる弊害——実質的な研究団体でいこうという初志を、や、もすると貫き通すことが困難となり、形骸化する危険もはらむが、より一層多くの人々に、史料保存の必要性を認識させるといふ点で解決していきたいものと念願している。そして既存の文書館、資料館を軸として、国内各地に、県段階でも、市町村段階でも、一つでも多くの史料保存機関が、設置されることを渴望する次第である。各地の保存機関が手をつながなければならぬのである。

すでに館報二二号で報告されているように、昨年一〇月初旬、史料館によって愛知県新城市出沢にある滝川家文書（旧旗本設楽氏代官）の調査が実施された。この調査には史料館から藤村・鶴岡両調査員、それに地元から私と勤務先の愛知教育大史学科学生一〇人、さらに文書所蔵者の滝川一美氏、郷土史家の林由治氏に参加した。限られた時間ではあったが、滝川氏と林氏の全面的な御協

国立史料館の史料所在調査に参加して

——その反省と問題点——

吉 永

（愛知教育大学
教授） 昭

力、御援助によって調査は順調にすすんだ。

以下、この調査に学生諸君と一緒に参加して個人として痛感させられたこと、また、調査を通して感じた今後の史料館への期待、註文といったものについて、二三述べさせていただきます。

調査に参加して、大学に勤務する者の一人として痛感させられたことは、文書を読むことと整理・保存す

ることは全く別であるということであった。勤務先では学生諸君に「地方史演習」で週一回、古文書のテキストや教室所蔵の実際の文書を教材として使用して講読演習をおこない、一応、何とか読めるまでに学生を指導し、その結果、毎年文書を使って卒業論文を書く学生がつづいている。また、教室教官の協力のもとで夏休みを利用しては泊り込みで文書の講読演習をおこなうなど、それなりの

努力はしていたつもりではあったが、ところが学生と一緒に今回の調査に参加して痛感させられたことは、読むことと整理することは全く別であるという、考えて見ればごくあたりまえの事であった。

作業は、学生が帳簿類については文書からはずれないために短冊形の仮カードを使って、それに表題・番号・形態などを記入して文書にはさみ、それを調査員が文書と照合して再検討し、それが終わったものについてはラベルとカードに番号を打って、

ラベルは文書に貼付け、カードは目録作成の基礎とする形で割合に順調にすすんだ。しかし、順調とはいっても文書の半帳・横長半帳といった形態表示方式のあり方や、使用した市販のラベルが永久的なものかどうかなど、やはりいくつかの問題に直面した。ところが最もむずかしかったのは一通物の場合で、たとえば、借金証文とはわかっていても、内容からこれにどういった表題を付けたらよいかということであった。また、封筒を利用したもの、封筒の大きさ、ラベルの位置、なかでも内容にふさわしい表題記入の作業は意外に時間を要し、その結果、表題の付けやすい文書のみが処理されて、内容の難解なものが残る結果となってしまう。また、注意したつもりであったが、一括して何らかの理由でまとめられてある文書が細分化されて処理されるなど、個々の点で多くの反省が必要となった。

いうまでもなく文書の整理、保存には経験の豊富ないわば熟練者が十分に時間をかけてあたる事がのぞましい。その意味で学生の参加する整理については批判もあるかと思われる。しかし、現実是一日も早く文書を整理し、目録をとって保存しなけ

れば文書そのものが散逸してしまう恐れがあるのが現状である。こうした現実を考えると、今回のような調査も場合によってはまた必要であり、その意味からすると、これまでの文書の読みを中心にした学生指導のあり方には問題が多いように思われる。やはり読むことと整理、保存することの訓練は、同時に併行しておこなわれるべきだというのが調査での第一の反省である。

こうした反省に立つて周辺を見た場合、たとえば私も関係している岡崎での古文書の会を例にとると、ここでは二〇才から七〇才以上の方々を含めて常時三〇名近くの男女会員が月二回集って、非常に盛会である。そして、この会の活動によって新しい文書が発見され、それが教材として利用されることも少なくない。しかし、関心はもっぱら読みの方にそがれて、読むことを生かして文書の整理、保存、目録の作成にはなかなか発展しないのが現状である。また、一歩すすんで研究分野にたち入れないのが現実である。けれども、ここでも文書の整理、研究の訓練が同時におこなわれる必要があろうし、そうでなければ、文書は読むためののみ利用され、それが終わると放棄さ

れ、所蔵者との関係も疎遠になり、保存も後退せざるを得ない。また、研究で利用したとしても、特定の問題関心によってそれに役立つ部分のみが利用され、それがすべば放置されることになりかねない。こうした意味でも読むこと、そしてそれを必ず整理し記録すること、さらには十分に保存することの必要は常に確認されるべきであろう。

二

次に、調査を通して考えさせられた史料館への今後の期待、註文といったことにふれると、何よりも各地域の刻々と変化する現実をふまえて、一日も早く近世古文書の体系的整理とそれの整理にあたっての最低の基準といったものを作成するように努力して欲しいということである。もちろん、このことは大変な仕事であるし、一研究機関のみに任せておくべきものでなくすべての人々が協力すべきことであるが、とりあえずは史料館がぜひ中心になって欲しいと思う。たとえば、文書の形態表示の統一やラベルやカードの使用の仕方についてシンポジウムを開いて共通理解を深めることも必要であろうし、庄屋文書や武家・町家文書など、性

格を異にする文書を扱っている人々毎に、整理についての会合を開くことも一つの方法かと思われる。

あるいは、検地帳や村明細帳などの基本文書や、内容は同じでも表題・形態の異なるものなどについて、各地域毎に写真(複写)で蒐集する作業を実施することも文書学確立への第一歩のように思われる。

こうした点から現在実施されている史料館の事業を見ると、たとえば、毎年開催されている近世史料取扱講習会は、史料の読解よりもむしろ整理・保存を目的としたものに早急に切りかえられるべきであろう。また、史料館の研究紀要も、大学のそれとちがって史料館独自の特色ある編集が必要かとも思われる。もちろん、文書の読解や整理は、文書や近世史自体についての研究がすすめばすすむほど深化するのであって、研究と読解、整理のあり方とは密接不可分の関係にある。その意味では研究紀要にすぐれた研究論文が掲載されることがのぞましい。しかし同時に、文書の形態、なりたちに関する古文書学的研究や、文書の紹介、文書整理の体験や問題点の指摘についての業績がもつとあってもよい筈である。ここでは大学などとちがって文書取

扱いの体験や情熱こそが最も尊重されるべき職場であって欲しいと思う。

ところで、最初史料館から文書調査の応援を求められたときには、人数の限られた一研究機関が全国各地の調査を計画するにあつては、到底その成果をあげることは無理であり、また、史料館には自ら現地に赴くこと以外にやるべきことが無数にあり、むしろ文書の調査、整理は地元に残せたらというのが卒直な気持ちであった。ところが、実際に調査に参加して調査員と一緒に行動してみても、史料館が文化財保護の立場を堅持して今後発展していくためには、やはり地域とのつながりを大切にして、刻々と変化する社会情勢の中で文書の推移を身を以って知ることがぜひとも必要であると思うようになった。それは史料館が現実から遊離し、官僚化することを防ぐことでもあり、他方、地元で文書を整理、保存するだけの条件がないとすれば、両者の提携による調査は、現段階でぜひとも必要であり、意義のあることといわなければならない。

この意味からすると、今回の調査では文書所蔵者の滝川氏や郷土史家の林氏の献身的な御協力があつて成果をあげることができたが、できれ

ば地元の研究者との交流の場がぜひとも欲しかったと思う。すでに新城では市史が刊行されて、それに関係された方々も多く、隣の三河一宮や豊川・豊橋でも現在、市町村史の編さんがおこなわれており、日夜、文書と取り組んでおられる研究者は非常に多い。したがって、これらの方々との交流の場が持たれ、これによって史料館と地域の研究者、さらに地元研究者相互の交流の輪が広まる契機ともなれば、その成果はもつと大きなものがあつたと思う。

この点、地元にあつて思うことは、その内部に種々の困難な問題を抱えているとはいえず、市町村史編さんの事業が続いているうちはまだよいとしても、それが終了したのちが最も問題であると思う。つまり市町村史編さんの事業を通して成長した多くの研究者や人々の歴史への関心のたかまりが、終了とともにどのような形で定着するのか、その定着のあり方こそが問題だと思ふ。その意味で地域研究者相互の交流・組織化の必要を切望している者として、ぜひとも調査中に交流の機会が欲しかったと思う。すでに紙数は尽きたが、今後とも調査の発展を大いに期待したい。



三河国設楽郡出沢村（現在、愛知県新城市出沢）

滝川家文書

該調査は昭和四十九年十月十一日から十四日の四日間にわたり、愛知教育大学の吉永昭教授に委嘱し、同大学教育学部の学生諸氏の協力を得て実施された。

滝川家の家系は同地において可成り古くまで遡り得るようであるが、現在の史料から確め得ることは元禄期以前から出沢村の庄屋役を勤め、正徳五年以降同地の地頭設楽氏三河領の大名主を兼帯、更に享保九年以降代官役に任命されている。

因みに旗本設楽氏は寛永二年拝領朱印高は三河国設楽郡のうちにおいて七百名、のち延宝七年六月丹波国水上・下野国芳賀両郡のうちにおいて千石を加増され、元禄四年七月丹波国の采地を下野国河内郡のうちに移され、うち三百石を弟に分知して都合知行高は千四百石となっているが、本領とも称すべき三河領は慶長以来異同なく、設楽郡門前・夏目・谷下・浅木・出沢・竹広の六カ村七百石分で、該地域の統治を担当する代官を三州代官と称し、寛政元年以降は竹広村に陣屋が設けられている。

上記によつて滝川家に襲藏される史料は、寛永五年御年貢庭帳をはじめ元禄期以降の宗門改帳・年貢関係等、出沢村の村方史料と大名主としての設楽氏所領六カ村の村方史料及び「御用文通扣」・「廻状留」等、代官勤役に係る陣屋史料が中核をなし、就中寛延以降の先納金に関する証書類や享保二十年以降の石代直設書等が纏つて残されている。

なお、同家は天保の一時期、旗本水谷氏（三千五百石）の用人として備中国布賀陣屋に赴き、同地の克明な陣屋日記も存するが、惜しむらくは虫害が甚しく閲覧は困難である。この他、滝川家の私的な分野では江戸期に同家に特許された鮎滝漁関係の史料は特色があり、断続はあるが寛政三・文久三年に亘る「農作帳」は同地方の農業生産の実態を知り得る貴重な史料といえよう。また化政期以降幕末にかけての当主二代は天文学・高嶋流砲術を修学するなど、進歩的文化人としての側面が窺える史料等々、文書内容は可成り多岐に亘っている。

これらの史料の一部は昭和三年から十年代にかけて滝川庸忠氏によつて「滝川家古書類集」と題して編綴され、滝川家文書以外の神社棟札写・碑文写や拓本類、諸家系図類の写、古戦場絵図から戸長役場書類の断簡等々、同氏が蒐集された所謂郷土史料も含まれる。

予算と時間的制約のため、今回はこれらの一部の調査に終つたが、後日、再調査を期したいと思う。（目録収録点数は約一、二〇〇点）。

丹後地方農村文書（縮緬・水産関係）

昭和五十年二月十八日から二十一日の四日間にわたり、京都府丹後地方の縮緬・水産史料を中心とする現地調査を、京都府立丹後郷土資料館に主体となつていただき、京都大学大学院生五名の協力を受けて、左の九文書について整理と仮目録の作成を行った。

イ旧算所村、西原家文書（与謝郡加悦町、西原利夫氏現蔵）約一〇六〇点

ロ算所区有文書（同町）四点
ハ算所機業組合文書（同町）九点
ニ旧亀島村、増井家文書（同郡伊根町、増井新助氏原蔵）約六三

本調査に際しては当館から藤村・鶴岡の両名が参加したが、豊橋市内に在住の史料所蔵者滝川一美氏にはご激務の時間をさいて現地へご同行下さり、一方ならぬご高配を頂き、また郷土史家林由治氏のご好意あるご援助を得た。記してご迷惑をおかけしたことをお詫びすると共に、深謝の意を表したい。

○点

ホ周枳機業組合文書（中郡大宮町）八点

ヘ旧周枳村、中川家文書（同右、中川辰蔵氏現蔵）七点

ト白杉酒造文書（同町）一二点

チ丹後織物工業組合文書（同郡峰山町）一三八点

リ浅茂川機業組合文書（竹野郡網野町）約二六〇点

「西原家文書」について。通常丹後縮緬の中心は、宮津湾南奥の与謝郡加悦谷地帯と丹後半島の中郡峰山盆地地帯の二つといわれているが、西原家は加悦町の有力な機元の一つ

であつて、文書は文化から明治初にわたる縮細関係史料に恵まれている。丹後内部だけでなく、近江との生糸取引史料があり、京都問屋、宮津藩との交渉文書が多い。その他、商家一般の金融文書が多いのは当然であるが、貢租・政治関係のものには、地租改正時の地方史料も含まれている。また、小室信夫を出した丹後自由民権運動の関連史料として今後の研究の手懸りともいふべき「天橋義塾規則」や庚寅倶楽部の史料が発掘されたことも記しておきたい。

「算所区有文書」と「算所機業組合文書」は少点数であるが、それぞれ享保・弘化に及ぶ「機屋記録帳」や文政の「機改帳」のような良質の基本史料を含むものである。

同じ縮細の中郡峰山地帯では、「周枳機業文書」にも「永代機屋帳」他があり、また「浅茂川機業組合文書」は、文化―大正に及ぶもので、一紙文書が多いながら、幕末の詳細な機屋仲間規定や他仲間との交渉文書などを多数含んでおり、明治には、組合決議・予算関係のものなどが豊富である。「丹後織物工業組合文書」は、峰山機業仲間の峰山絹問

屋・京都問屋との交渉文書を含み、宝暦から幕末に至る軸装十本の良好な史料であるが、この文書については折からの豪雪のため今回は後日を目指し、京都大学影写本「丹後峰山町縮細同業組合文書」がこの写本であることを確認し、簡単な仮目録を作成するにとどめた。

水産関係については、丹後半島にあり独自の漁村民俗と美しい景観で知られる「伊根の舟屋」を持つ伊根町の「増井家文書」は、明和―大正に至るもので、水産関係として、津軽あるいは長州などの北廻り船の難船関係史料、鯨・鯺漁他の漁業史料、また丹屋史料なども若干含まれている。なお、今回の調査は、史料の現蔵地にあたる丹後郷土資料館の釈副館長、増田資料課長、百田技官をはじめ館員諸氏、京都大学の水本・猪飼・田中・笠谷・今西の諸氏が、また、当史料館からは、鎌田・井上が助力のため参加した。末尾であるが、前記の史料原蔵者諸氏および関係各位から、調査にあたり格別のご便宜をお計りいただいたことを記して謝意を表したい。

近世史料目録の調査と収集

当館の事業である所在調査の一部

門として、既に調査の成果として作

成されている近世史料目録の収集がある。本誌一二号にその趣旨を述べ、一八号で報告した通り各地関係機関のご協力により目録の所在を確認する事が出来た。

本年度は前年度に引続き国立国会図書館所蔵の史料目録のうち三〇冊を収集し、これで同館関係を一応終了した。従来当館に所蔵されている目録と合せると、都道府県立図書館の郷土資料関係目録の大半を整備できたと考えている。

一方、前述の昭和四五年度実施の都道府県所在近世史料目録調査票に基いて収集計画を立てた。予算執行の必要上、各図書館に複写手続、丁数など複雑な調査を依頼したが、事務多忙の折にかかわらず詳細な回答があり、感謝に堪えない。

この回答により、複写による収集を計画したが、予算上から本年度中は目録三〇冊、複写目録九四冊を収集した。実施に当っては、史料目録の在庫調査、地域関係機関との連絡昭和四十六年以降の近世史料目録調査票の送付、史料目録の大量のため複写事務との調整、また史料目録の特別貸出許可など、各関係図書館の格別のご高配を得た。又特に御名前は記さないが、献身的にご協力下さった方々に対してはまことに感謝に堪えない。

この業務は当館だけの力では到底出来ないものであり、関係各機関のご協力が前提とされる仕事である。

それであるから尚一層将来のために考えざるを得ない問題を感じる。繰返すが、当館独自では出来ないとする矢張り今後の各地の関係機関との協力が問題になる。つまり各地機関で近世史料目録の収集、整備が行なわれなければ、この仕事は一つの壁に当るのではないかと思う。

一つの例として、各地の実情を把握していないが、県市町村誌の編纂に際して部内資料として史料目録が作成される場合があるように伺っている。刊行される県市町村誌についての情報を入手する手段はあるが、現在の所史料目録については情報収集すら困難である。勿論部内資料であるから、この業務の目的である収集は編纂事業完成後のご好意にすが以外にはない。ただ折角作成されている史料目録を見落すのは如何にも残念である。

これらの点を含めて今後の各機関のご協力をお願いする次第である。

旗本家文書の所在調査

報告その1

第一 史料室

本調査実施の趣旨・目的および調査方法等については、前号に述べた。この調査は本来、当室員が直接所蔵者宅を訪問して、概括的ではあつても悉皆調査を行う建前であるが、本誌前号にこの調査計画を発表して以来、各機関や関係各位から次々に情報や資料が提供されて来ており、この報告では、それらの一部を紹介して行きたい。史料所蔵者各位はもとより、これら関係機関・関係者諸氏に対して改めて深い謝意を表するとともに、今後のご協力とご教示をお願い申し上げる。以下、本誌を利用して、逐次簡単に概況を報告して行きたい。詳細は当室にお問い合わせ願いたい。

なお、情報を寄せられた方々の数が多数にのぼるために、今後現地調査を継続する予定のものは掲載しなかったし、今回の調査計画実施以前に、既に他の機関等によって所在が明らかにされているものについても、別途にまとめて公表することにした。

但し、当館が所蔵しているもの、あるいは今回の調査計画実施以前に当館が所在を確認しているものについては、ここに一括して示すことにした。(以下順不同)

註1. ①は当館の直接調査による目録があるもの、②は他機関等の調査目録によるもの、③は所蔵者等より情報提供があつたものを示す。但し、④のうち少数史料については調査記録にとどめたものがある。⑤(一)内は調査機関名を示す。

2. 記載順序は、大略、文書名「現蔵者・系統、知行高、主な役職、主な史料、概略点数」である。

3. 文書名中の地名は、本領地あるいは主たる知行所陣屋所在地(推定も含む)を示す。未確認のものについては省いた。

(1) 備中国帯江戸川家文書「兵庫県川西市 戸川宏三氏。安利系。三千石。勘定奉行・大目付。主として幕末(弘化・慶応期)の知行所および江戸表における年々請払勘定・幕方見積・拝借金・諸方借財・御囲米金・講・札場勘定帳等の財用関係書類に見るべきものが多い。他に系譜類、幕末の大目付鉦三郎(号晩香)勤役中の書類、静岡藩時代書類、明治一〇―二〇年代晩香日記・書類等。約三〇〇点。①

(2) 同右「山形県鶴岡市 戸川安章氏。鉦三郎弟求馬(家督)系(1)は鉦三郎子錦造系。維新後帯江住)系図・先祖書類、知行所および屋敷図、安利分知朱印状他数点。②

(3) 同右「東京都墨田区 戸川俊郎氏・同荒川区 戸川英雄氏。求馬分家系。先祖書類数点。③

(4) 下野国都賀郡蜷川家文書「大阪府池田市 蜷川親治氏。親熙系。五百石。奥・表右筆。後水尾院・閑院尹美親王・唐橋喬任卿・蜷川親当等筆和歌集、系図類、知行所反別帳・割付状のほか主として親熙代に作成された書法・書札札類を特色とする。他に、中世文書約九五通(写・略卷子仕立)。河内国観心寺宛文書と上野国山名八幡宮宛文書を主とする。前者は大部分大日本古文書「観心寺文書」・「河内長野市史四 史料編一」に収録、後者は新発見史料か。約一五〇点。な

お、この項中世史料については、とくに埼玉大学助教授田代脩氏のご教示を得た。特記して謝意を表する。④

(5) 近江国栗太郡(カ)山岡家文書「千葉県市川市、山岡景恭氏。景友(道阿弥)系。初め五千石(後元米三百俵)。目付・佐渡奉行。系譜類がまとまつており、天正・慶長・寛永年間の主として景友・景以宛の芳吉・秀忠等朱印状、知行目録、景友申置状、明暦・寛文ごろ美作守宛諸家書状に重要なもの存す。他に光浄院関係書類、幕末・維新期日録類。約二〇〇点。⑤

(6) 相模郡高座郡山岡家文書「東京都目黒区 山岡知博氏。景民系。七百石(カ)。佐渡奉行。系図・親類書類、天正・元禄知行宛行(相模・常陸)状・鄉村高帳、知行所平均取調帳(明治書出)、知行所絵図・出役見聞絵図、他書付類。約一〇〇点。⑥

(7) 武蔵国埼玉郡牛込家文書「東京都武蔵野市 牛込三郎氏。重泰系。千石。長崎奉行。暦応・寛永年間江戸氏文書(七通)・牛込氏文書(一四通)計三巻(共に都文化財指定)。系図類、「牛込古諺記」元禄十年六百石拝領高書付・屋敷

元禄十年六百石拝領高書付・屋敷

図、重系長崎奉行勤役に関する「時樂翁実話」・「独向集」等の記録、発祥地上野関係記録若干。約六〇点。A

(8) 上野国佐位郡宮崎家文書 東京都豊島区 宮崎成勝氏。重俊系。二千石。伏見奉行・京都町奉行・江戸町奉行・御使番。宮崎氏系図類が良質のもの。他に位記・歴代知行等書付。約一五五点。A

(9) 播磨国美藝郡一柳家文書 神奈川県川崎市 一柳直通氏。直照系。五千石。火事場見廻・浦賀奉行。一柳家系図、官位受領関係史料。秀吉朱印状、老中御書付類、郡会・県会・立憲政友会関係書類。約四〇点。A

(10) 信濃国津久松家文書 東京都練馬区 久松博芳氏。忠利系。五千石。定火消・小姓組頭・大御番頭。内容詳細は、本誌別掲(一四頁)参照。約三二〇点。昭和四九年度に国立史料館に寄託。A

(11) 武蔵国都築郡勝田久志本家文書 東京都渋谷区 久志本欣也氏。常真系。三百石。番医。慶長四年知行割付状・讓状、渡会氏重代系図・家譜・親類書等、役向書類等記録類若干。B (神奈川県史編集室)

(12) 武蔵国都築郡長津田岡野家文書

神奈川県横浜市 井上レン氏。融成系。千五百石。鉄砲頭・持弓頭・火事場見廻・御使番。北条氏印判状・書状、天正以降知行宛行状、岡野氏系譜・親類書・相続関係書類、諸役向関係記録類、知行所内諸寺朱印状写。約三三〇点。他に名主井上家文書約一二〇点。B (神奈川県史編集室)

(13) 上総国望陀郡豊島家文書 東京都品川区 豊島信明氏。泰利系。二百五十石。御小納戸頭取。若干。A

(14) 三河国深溝板倉家文書 東京都杉並区 板倉利七氏。重直系。八千石。大番頭。御書院番頭。系図。A

(15) 大和国宇智郡船越家文書 東京都文京区 船越ふみ氏。為景系。五千五百石余。作事奉行・御書院番頭。過去帳。A

(16) 摂津国豊島郡船越家文書 東京都板橋区 船越景二氏。景通系。七百石。小姓組番士。系図・徳川家康書状。A

(17) 以下、大震災・戦災等により、史料を亡失したもの。C

1. 室賀正信系 神奈川県鎌倉市 室賀明德氏。千二百石。大坂町奉行。

2. 柴田勝家系 東京都葛飾区 柴田勝温氏。三千二十四石。側衆。

3. 柳沢元政系 東京都豊島区 柳沢

元俊氏。三百石。御書院番。

4. 妻木重門系(カ) 東京都足立区 神宮セイ氏。五百石。御書院番。

5. 内藤忠清系 千葉県印旛郡 内藤忠義氏。五千石。小姓組番頭。

6. 松前当広系(カ) 東京都世田谷区 松前広久氏。千五百石。御小納戸(カ) 当館所蔵分

(1) 播磨国屋形池田家文書 所蔵。政治系。三千石。御使番(「史料館所蔵史料目録」第二十一集に収録)

(2) 武蔵国八王子河野家文書 所蔵。通重系。二百七十石。千人頭。

(3) 上野国東小保方久永家文書 所蔵。重勝系。三千二百石。書院番頭・浦賀奉行。(一部前出「目録」に収録。)なお、静岡県焼津市 久永功氏の所蔵文書は戦災で消失。

(4) 美濃国不破郡若手村竹中家文書 所蔵。重高系。五千石。交代寄合。

(5) 武蔵国幡羅郡永井太田村松崎家文書 所蔵(F)。五百石。御書院番。

受贈図書

昭和四八年度 (二)

神奈川県関係新聞記事索引 第二二集

(神奈川県立文化資料館)

晦結澄言(和歌山県立図書館)

地方の歴史 第三号(中村保良)

関口日記 第三卷(横浜市教育委員会)

津山市史 第三卷

文化財の保護 第六号(東京都教育庁)

旭川市史 第七卷

兵庫県議会史 第四輯別卷

所蔵雑誌目録 追録(神奈川大学図書館)

蔵書目録 和書の部・洋書の部(同右)

兵庫県古文書緊急調査報告 1 (兵庫史学会)

梅は匂い人はこころー伊藤英三伝(城山三郎)

かな解読字典(中田易直等)

角館誌 第七卷・別巻

武蔵国多摩郡江古田村名主文書 土地年貢関係(堀野家)

東大阪市史 近代1

山口県立図書館郷土資料目録

五代友厚関係文書目録〔大阪商工会議所〕

山形県史 本編三農業編

BEITRÄGE ZUR JAPANOLOGIE

10 (Erick Pauer)

Committee on East asian Librar-

ies No.41 [Committee on East

Asian Libraries]

甲州文庫史料 第二卷甲府町方編〔山梨

県立図書館〕

日本古代・中世史の地方的展開〔豊田武

教授還暦記念会〕

日本近世史の地方的展開〔同右〕

武蔵国豊島郡戸塚村中村家文書目録補編

〔新宿区立中央図書館郷土資料室〕

御殿場市史資料所在目録 第九集近世史

料編(六)

鯖江市史 史料編 第一巻民俗編

愛媛県医師会史 総合版

武蔵府中叢書 第一巻町村合併・北多摩

地方事務所〔府中市企画課〕

〔愛媛県〕中島町誌

譜牒餘録 上〔内閣文庫〕

戸主権の成立〔石井良助〕

大江文庫目録 江戸時代篇〔東京家政学

院大学図書館〕

庁内刊行資料目録 九〔東京都公文書館〕

御府内沿革図書目録 二〔同右〕

むかしの宿・むかしの旅〔小丸俊雄〕

藤枝市史 上・下巻

鹿児島県史料 忠義公史料Ⅰ〔鹿児島県

維新史料編さん所〕

徳島藩士譜 下巻〔宮本武史〕

滋賀大学経済学部付属史料館所蔵資料目

録 一三

蔵書目録 第二巻社会科学〔山梨県立図

書館〕

福島県教育史 第三巻〔福島県教育セン

ター〕

解説目録 第三一五号〔伊丹市立博物館〕

浦和市文化財調査報告書 第一八集〔浦

和市教育委員会〕

尾張国の在庁官人中嶋氏をめぐる研究

〔中嶋芳〕

東京都文化財総合目録〔東京都教育庁〕

香川大学増加図書目録 昭和四十七年度

〔香川大学付属図書館〕

河内長野市史 第十巻

〔佐賀県〕神崎町史

丸井今井百年の歩み〔石田篤郎〕

利用案内〔天理大学付属天理図書館〕

竜王町古文書目録集〔滋賀県竜王町教育

委員会〕

北海道立青函トンネル記念館〔要覧〕

茨城県史料 近代政治社会編Ⅰ

近代日本文学合索引〔大阪府立図書館

蔵書目録補遺〕

奈良女子大学増加図書目録 昭和四十七

年度

近世の専売制度〔吉永 昭〕

布施市史編集史料目録 第一―三冊〔布

施市教育委員会〕

薩摩半島南部民俗資料調査報告書〔鹿児

島県明治百年記念館建設調査室〕

葦田町村明細帳集録〔石井岩夫〕

〔京都府〕野田川町誌〔野田川町教育委

員会〕

四條畷市史 第一巻

要覧昭和四十八年度〔北海道開拓記念館〕

〔北海道〕古平町史 第一巻

茨城県史料 考古資料編古墳時代

見鳴と鯨〔多田穂波〕

半田市誌 資料篇Ⅳ

三井事業史 資料篇Ⅰ〔三井文庫〕

佐賀県史料集成 古文書篇第一四巻

兵庫県同和教育関係史料集 第三集〔兵

庫県立教育研修所〕

秋田歴史資料目録 第十集〔秋田県立秋

田図書館〕

豊川市史

〔北海道〕早来町史年表

早来町史

大和町市史 正・続編

高槻市史 第六巻考古編

〔宮崎県〕高千穂町史年表

高千穂町史

七尾市史 資料編第三巻〔七尾市史編纂

専門委員会〕

青森県立図書館郷土双書 五 奥民図彙

日原寛書〔大庭良美〕

部落の歴史と解放運動〔大阪府同和対策

部〕

滋賀県古文書等緊急調査報告 Ⅰ〔文化

財保護課〕

大館遺跡発掘調査概報〔能代市教育委員

会〕

解題書目 第三・四集〔青森県立図書館〕

大阪府泉南郡岬町史料採訪各個別目録

〔大阪府史編集室〕

摂河泉史文献目録〔同右〕

昭和四十九年度 (一)

暮らしの設計 (一九七四) 四月号〔中央

公論社〕

にんげん百科 三八〔日本メーロオーダ

ー社〕

警視庁百年の歩み

姫路市史 史料編一

榊形城跡〔花ヶ前盛明〕

日本外交文書 大正九年第三冊下巻・同

十年第一冊上巻〔外務省〕

山口県内所在史料目録集 第一集〔山口

県文書館

新修尾道市史 第三卷

宝塚市史編集資料目録集 五・六

川西市史編集資料目録 五別冊一・一一

愛知図書館参考図書目録 一九七四(愛知県文化会館)

豊橋市史 第五卷

郷土資料目録 第一〇集(岐阜県立図書館)

蔵書目録 第四卷(県立長野図書館)

田島家文書 第一卷(東京都教育庁)

東京都埋蔵文化財調査報告 第二集(同右)

市立行田図書館郷土資料目録

(北海道) 戸井町史

北海道所蔵公文書件名目録 三(北海道総務部)

日本民俗資料館 昭和四一―四七年度(要覧)

観覧者実態調査 昭和四八年度(東京国立博物館)

千葉県の先覚(千葉県企画部)

長野県史 近世史料編第五卷(二)中信地方

山形市史編集資料 第三四・三五号

茨城百姓一揆(植田敏雄)

仙台市博物館収蔵資料目録 IV

加越能マイクロフィルム資料解説目録

(富山県立図書館)

秋山正香のGlimpse(行田市立図書館)

収蔵資料月報 No.一一―一二(京都府立)

総合資料館

関西大学東西学術研究所資料集刊 九

郷土の歴史シリーズ第一回特別展(目録)

(史料集)(仙台市博物館)

大阪府教育百年史 第四卷(大阪府教育委員会)

函館市史 史料編第一卷

金沢市史(現代篇)上・下

青森県埋蔵文化財調査報告書 第八・九

郷土資料目録 第六集―八集(彦根市立図書館)

くらしの文化財 農村・漁村の生産用具

(京都府立丹後資料館)

丹後の古墳(同右)

要覧(同右)

丹後の歴史と文化(同右)

錦絵による丹後の伝説(同右)

アニメ 一九七四・No.四(高橋健)

立正大学古文書学研究室叢書 No.二

千葉県史料 近世編文化史料

教育研究報告書件名目録 IV(北海道立教育研究所)

むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告書

第二次(青森県教育委員会)

輪島市史 資料編第五卷

国文学文献資料所在調査仮目録 昭和四

七年度(国文学研究資料館文献資料部)

芦屋市史編集史料目録集 一

(島根県) 玉湯町史 上巻

朝日新聞記事集成 第一集(枚方市史編纂委員会)

北海道の教育相談(北海道立教育研究所)

同和行政の手引き(大阪市同和对策部)

部落解放は国民的課題(同右)

人権の尊重―同和問題の正しい認識―

(同右)

国・市同和对策審議会答申集(同右)

部落差別の歴史と実態(同右)

市立函館図書館蔵郷土資料分類目録

第一分冊―第七分冊

続函館市史資料集 第一―二号

安政元年箱館湊日米応接日記(馬場修・田畑幸三郎)

曲亭馬琴書簡集(早稲田大学図書館)

到津・小山田文書目録(大分県教育委員会)

会)

学術文献取報 一四九―一五一号(北海道教育大学附属図書館)

特別展「昔の旅」展示品図録(埼玉県立博物館)

富山遺跡・伝永泉寺発掘調査略報(青森県教育委員会)

長岡科学博物館考古研究室調査報告 一

四

埼玉県立博物館要覧 第一号

明治大学刑事事博物館目録 四一・四二

東京都公文書館蔵書目録 一

碧南市史 第三卷

文芸と自然(共立女子大学文芸部)

復刻芸州府中荘誌(菅原守)

(広島県) 美和村史

東海市史 資料編第二卷

(岐阜県) 白鳥町史 史料編

糟谷縫右衛門家一五〇年の年々勘定改

第一―三集(小林定信)

鎌倉国宝館論集 第一七

川北家文書目録 一(高知県教育委員会)

文書目録 第一集(早稲田大学図書館)

郷土資料分類目録 第八分冊(市立函館図書館)

金沢大学図書館目録 第一一巻

山形県立図書館蔵書目録 語学・文学

蔵書目録 VII巻(東京大学経済学部)

高木家文書調査報告 III(名古屋大学図書館)

高木家文書調査報告 III(名古屋大学図書館)

戸田市有形民俗調査資料(民具)の所在

調査(1)(戸田市教育委員会)

石川県立郷土資料館紀要 第四号

古河市史資料 第一集

小場家文書 上巻(福山市教育委員会)

青森県植物研究年譜(青森県立郷土館)

青森県立郷土館見学のしおり

福山市立福山城博物館附属鑑蔵文書館

(要覧)

増加図書目録 昭和四八(市立松本図書館)

北海道開拓記念館調査報告 第六・七号

茨城県史料 中世編II(茨城県史編さん

中世史部会)

開拓使刊「蝦夷風俗彙纂」引用書解題

〔高倉新一郎〕

静岡市史 近世史料一

郷土資料目録 第五集〔彦根市立図書館〕

豊橋市史史料目録 五

旧船越の舞台移築修理工事報告書〔川崎市〕

内閣文庫〔所蔵〕紅葉山文庫本展示目録

〔国立公文書館〕

近世史料目録 一〔茨城県歴史館史料部史料室〕

目定の彫刻〔森川不覚〕

八戸市史 史料編近世四

大阪研究文献目録 四〔大阪市史編集室〕

旧三沢家住宅〔榎屋〕移築修理工事報告書〔川崎市〕

尼崎市史 第五卷

吹田市史 第六卷

神奈川県史 資料編九・一一

市原のあゆみ〔市原市教育委員会〕

宮崎県立図書館蔵書目録 第四卷

藤沢市史資料所在目録稿 第三・五・七集

〔山形県〕

学術雑誌目録 和文篇〔岩手大学付属図書館〕

全道高校生郷土研究作品集〔北海道開拓記念館〕

一括寄贈資料目録 第七集〔同右〕

知恩院史料集 日鑑・書翰篇一〔知恩院〕

史料編纂所〕

解説目録 第六号〔伊丹市立博物館〕

市川市史 第二・七卷

稚内市史〔稚内市史編纂室〕

〔北海道〕豊頃町史

〔秋田県〕田沢湖町史

〔群馬県〕宮城村誌

〔群馬県〕伊香保誌

〔佐渡〕小木町史 村の歴史上・下巻

〔京都府〕岩滝町誌

加古川誌 第二卷〔別府町誌編集委員会〕

出雲市三十年誌

新修丸亀市史

〔香川県〕新修詫間町誌

鹿屋市史 上・下巻

〔北海道〕美瑛町史 第一・三卷

〔北海道〕幌加内町史

〔岩手県〕大槌町史 上巻

〔茨城県〕鹿島町史 第一卷

秦野の文化財〔神奈川県史編纂室〕

昭和四十六年度横浜市埋蔵文化財調査報告書 III〔横浜市埋蔵文化財調査委員会〕

昭和四十七年度横浜市埋蔵文化財調査報告書 I・II〔同右〕

上山市史編集資料 第九集

人文研究総目録〔大阪市立大学文学会〕

多摩川流域の縄文土器展目録〔吉田格他〕

八丈島誌〔八丈町教育委員会〕

藤沢市議会史 資料編・記述編〔地方都市行政研究会〕

再刊板尾郷誌〔板尾郷教育研究会〕

〔福井県〕芦原町史

〔長野県〕山ノ内町誌

〔岐阜県〕柳津町史 佐波編・柳津編

〔静岡県〕佐久間町史 上巻

蒲郡市誌

相生市議会史

徳島市史 第一卷総説編

〔香川県〕財田町誌

日本塩業大系編さん資料 一・二

〔日本専売公社・塩業近代化本部〕

広島相互銀行史

親和銀行三十年〔峰泰〕

福島市史 第四卷近代一

茨城県終戦処理史〔茨城県民生部世話課〕

越谷市史 五史料二

〔新潟県〕刈羽村物語

〔福井県〕郷土誌大飯

山梨県民主議会史 第六卷

静岡県の百年

明治初期静岡県史料 第一―五卷〔静岡県史料刊行会〕

静岡県大正震災誌

静岡県御巡幸記録〔静岡県〕

新編一宮市史 資料編四

香川県議会史 第一・二巻

愛媛県編年史 第七

山形県飯豊町白川ダム水没遺跡発掘調査報告 数馬遺跡〔山形県教育委員会〕

Cultural and Social Center For the

Asian & Pacific Region Annual

Report 1973 [Cultural and Social

Center]

昭和四十二年度広島県行政資料目録〔広島県立図書館〕

昭和四十三年度受入広島県行政資料〔印刷物〕名一覽〔同右〕

広島県刊行政資料名一覽 昭和四四・四五・四六年度受入〔同右〕

伊丹地方郷土資料総合目録〔伊丹地方史研究会〕

大岡越前守展・古墳出土品展〔岡崎市現職教育委員会・岡崎地方史研究会〕

かながわ名宝展〔神奈川県立博物館〕

福島県文化センター歴史資料館利用案内

葛飾図書館郷土資料室〔あんない〕

茨城県歴史館〔要覧〕

日本の家具―伝統・継承・創造〔家具の歴史館〕

新庄〔新庄市〕

まむろがわ〔山形県真室川町〕

統合二十周年誌〔鳥取県江府町〕

山形県立博物館〔要覧〕

富山県史 史料編V近世下

瀬戸内海歴史民俗資料館〔要覧〕

瀬戸内海歴史民俗資料館展示目録

BEITRAGE ZUR JAPANOLOG-

IE Band 9 [Günher Wenck]

同右 Band 11 [Peter Pantzer]

大館市史編さん調査資料 第七・一二

一三集

いわき市史 第五・七・九卷・別巻・附録

鳥取県史

第一・二・六卷

日本民俗地図 III・IV・解説書〔文化庁〕

郷土誌シリーズ 九郷土の歴史城下町上

田〔下〕〔上田市立博物館〕

浜村コレクション能面・狂言面展目録

〔同右〕

尼崎市議会史 記述篇・資料篇・施政方針演説集

針演説集

栃木県史 史料編古代・近世一・近現代

四

埼玉県議会史 第八卷

佐賀県史料集成古文書編 第一五卷

青森県警察史 上巻

〔高知県〕 大正町誌

〔富山県〕 宇奈月町史

和歌山県議会史 第三卷

山口県会史 自昭和六年至昭和十五年

須賀川市史 自然・原始・古代

〔千葉県〕 浦安町誌 上

静岡県教育史 年表統計篇〔静岡県立教育研究所〕

福岡市史

第七卷

長野県教育史 第五卷〔長野県教育史料行会〕

芦別市史

福井県議会 第一卷

北海道開拓記念館特別展目録 第一一回

内閣文庫収書目録 第三六号

〔青森県〕 岩木町誌

町田市史 上巻

青梅市の石仏〔青梅市教育委員会〕

大磯町指定文化財報告書 第一集〔大磯教育委員会〕

〔富山県〕 東岩瀬郷土史近代百年のあゆみ

近江蒲生野〔八日市郷土文化研究会〕

静岡県印刷文化史

静岡県火災誌〔静岡県〕

兵庫県史 第一巻

〔広島県〕 世羅西町誌〔中国観光地誌社〕

美土里の歴史と伝説〔広島県美土里町史編修委員会〕

池田町を中心とした部落史編年資料集

〔徳島県池田町教育委員会他〕

普通寺市の古代文化

村に生きる人々―東上磯部村と萩原鎌太郎―〔佐々木潤之介他〕

津軽覚え書〔弘前市立弘前図書館〕

伊予岩城島の歴史 上・下巻〔岩城村郷土誌編集委員会〕

熊本藩年表稿〔細川藩政史研究会〕

安芸本郷〔中国観光地誌社〕

福岡県の百年

府中の風土誌〔府中市役所〕

豊島風土記〔区立豊島図書館〕

無形の民俗資料 第一九集〔文化財保護委員会〕

国文学研究文庫目録 昭和四十六年〔国文学研究資料館〕

式亭三馬の文芸〔本田康雄〕

小浜市史 金石文編

福井むかしばなし〔福井市教育委員会〕

水戸天狗党と久慈川舟運〔金沢春友〕

新庄の石仏〔大友義助〕

堀家の歴史〔堀直敬〕

松前史年表

百年の歩み―信濃毎日新聞

瓦と埴図録〔京都国立博物館〕

〔宮城県〕 鳴瀬町誌

古文書近世史料目録 第六号〔山形大学附属郷土博物館〕

能代市史資料 第五号

富田林市史 第四巻〔史料編一〕

鹿児島県史料集 VIII・X・XIV〔鹿児島県立図書館〕

〔新潟県〕 巻町双書 ⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱

・別冊

日本の貨幣 三〔日本銀行調査局〕

長興寺村文書目録〔豊中市立図書館〕

八尾市史編纂史料目録 第一集〔八尾郷土文化研究会〕

古河市史料所在目録 第一集

研究資料 第六集〔宮崎県立博物館〕

文化財シリーズ 七・八〔杉並区教育委員会〕

枚方市史研究紀要 第五・六号

江戸川文化叢書 第四集〔江戸川区立郷土資料室〕

兵庫県民俗調査報告 五〔兵庫県教育委員会〕

福井県郷土新書 一〔福井県郷土誌懇談会〕

葛飾区の歴史と史跡〔区立葛飾図書館〕

市川市民俗調査概要 〔一〕

日本外交文書 ワシントン会議軍備制限問題〔外務省〕

〔京都府〕 井手町史シリーズ 第一集

郷土資料叢書 第七輯〔新庄図書館〕

〔福島県〕 朝日町史編集資料 第三号

広瀬の紹介〔島根県広瀬町観光協会〕

広瀬の碑石文〔妹尾豊二郎〕

山神遺跡発掘調査報告書〔日光市〕

小倉遺跡発掘調査報告書〔同右〕

朝倉橋広庭宮跡伝承地第一次発掘調査報告〔九州歴史資料館〕

高津郷土資料集 第八・一一編〔川崎市立高津図書館〕

道中泊休覚之帳〔北海道市教育委員会〕

北海道市史資料集 第一・二集

土浦歴史地図〔土浦市史編さん委員会〕

小袖模様雛形本集成 式 解題〔文彩社〕

袖ひながた〔同右〕

三井事業史 資料編三〔三井文庫〕

群馬県立博物館研究報告 第八・九集

日光叢書 第十四卷〔東照宮社務所〕

〔以下次号〕

昭和四九年度 新収史料紹介(二)

⑤はマイクロフィルムによる収集を示す

受託史料

備中国
松山板倉家文書

本文書は、延享元年の移封により

備中松山(現高梁)の城主(五万石)となつた板倉家に伝来したものであるが、このたび同族の板倉久勝氏(備中庭瀬の板倉家の子孫)の好意あるご尽力により、当館に寄託されることになった。ここに改めて同氏のご厚志に深く感謝の意を表する次第である。

文書は家臣が書上げた先祖以来の由緒を編冊したもので、表紙は比較的新しく改裝されており、それには「松山御家中由緒書」の表題がある。そのうち、安永八年のものが五冊、文政九年のものが十冊で、何れも欠本があり、内容的にも安永以前の分は重複するが、藩士の由緒書としてまとまつており、大いに利用されるであろう。ほかに安永九年の「組外組並由緒書」一冊がある。

なお、本文書の残存部分についても、そのうち追加寄託を受けること

になっている。(全一六冊。寄託者
〓神戸市垂水区千代が丘二二一—
五 板倉久勝氏)

信濃国
称津久松家文書

本文書は、当館第一史料室が行つている旗本家文書所在調査(本誌前号参照)による調査後に、所蔵者からのお申出によつて受託したものである。史料の保存に高い関心を示された所蔵者に深甚の敬意を表するとともに、調査にご協力下さつた上に史料の寄託にご尽力下さつた臼井克己氏に改めて感謝申上げる。

久松家は、大垣城主忠良の遺領継承の際に、忠良の長子忠利が五千石を分知されて寄合に列し、独立したもので、この時(寛永元年)以来、信濃國小県および佐久両郡内において各六〜八村を知行所として明治維新に至つた。代々定火消、百人組頭、御小姓組頭などの役につくことが多く、天保には大御番頭を勤めている。

文書の内容としては、(一)久松家に関するもの、(二)御役儀関係の諸書類(三)維新後の旧知旧録関係史料などが

主要なものである。(一)に属するものには、数種の系譜類をはじめ、位記口宣案や、実名および花押の考証書付などの紀伝的史料のほか、知行所の村高や人数を示す史料があり、維新後の郡村附帳や物成平均取調帳と関連する。また忠保(カク)晩年の天保八年前後における家政取締に関する書状案は、断片的ながら上級旗本の実態を示すものである。このほか公儀御法事の際の香奠献上願や、武術兵法関係の写本類も、この部門に付加されよう。

(二)の御役儀に関するものは、礼式や役向の勤方についての書付、覚書、手留、書拔の類が圧倒的に多い。とくに大御番頭を勤めた頃のものが多いが、小形の折本に仕立てられて、席図などの絵図を含むこれらの書付類は、幕府の制規を知るのに欠くことのできない史料である。先役からの写本が多いのは他の例と変らない。

(三)の旧知旧録関係のなかでは、明治三十四年にかけて久松家の元家来

が旧録を離れて帰農帰商していく過程を示す一連の史料が目される。

「現石高仕訳書上」「帰農商送籍一札案」「扶助金請取手形」などであるが、旗本の家臣団構成と維新によるその崩壊の一例を見ることができ、その間における三代以上の譜代と二代以下の家来との差別、貫属への転進あるいは扶助金の交付にみせる新政府の対応など、量的には多くないが内容的には豊富な素材をもっている。当主栄之助の弟が旧知行所を頼つて帰農を試みているなど、幕初以来の知行所との地縁関係も見落すことはできない。

なお、文書の一部は寄託者の手元に残されているが、その大部分はマイクロフィルムにより収集したので、この分の内容については後出の紹介記事を参照されたい。

(六一冊、九七通、六五折、八九枚四鋪、三綴。寄託者〓東京都練馬区東大泉町三九七—三七 久松博芳氏)

リール〓一、一八二コマ)

⑥ 幕府
右筆 蛭川家文書

内容については前掲「旗本文書の所在調査」を参照。このほとんどを収録した。(収録点数一四二点。三

⑦ 上 総 国
塩生郡立木村 高橋家文書

本文書は、原蔵者から昭和四八年

度に茂原市に寄贈されたものであり、現在、茂原市立図書館に保管され、いずれは公開される予定との由である。本文書全体については、昭和四九年度に、中央大学文学部「古文書学演習」に参加している教官・学生等諸氏の手により、一紙物の一部を除く「仮目録」が作成されており、便利である。

高橋家は、千葉県内屈指の地主家であり、幕末には、鶴牧藩地役人に任命され、明治以後は、千葉県会から衆議院議員、多額納税者貴族院議員として中央政界にも関わっている。文書全体の概要は、高橋家の地主経営（土地集積・貸付他）関係が揃っており、幕末（主に天保以後）には、地役人関係書類、鶴牧藩御用留・村政関係書類が整備されている。明治以後には、帝国議会（議事録・書翰他）・千葉県会関係書類（明治初期）があり、以上が文書の中心部分と思われる。

今回の撮影は、このうち鶴牧藩（立木村役場）御用留二八冊について行なった。文政一〇年から明治八年まで年代的にもよく揃っており（欠年は、文政一二・天保元・同九・安政六・文久三・慶応三・明治四・同六・同七年である）、内容は、鶴牧

御役所から高橋氏への直申聞・公儀御触書・鶴牧役所御触書・廻状・村方願書・請書・高橋氏から村方への書付の写し等々、幕末鶴巻藩民政史料として整備されたものである。

（原蔵者）東京都練馬区 高橋氏之助氏。茂原市教育委員会所蔵。総点数二八冊。一二リール七、九五六コマ。

⑤ 信濃国 久松家文書

本文書は、久松家文書が当館に寄託されるに当り、その一部を原蔵者の手元に残すことになったため、それらをマイクロフィルムで収集し、受託史料との一貫した保存利用を計ったものである。（前掲受託史料参照）

収録史料は、系図、実名・花押考、旗・馬印などの雛形、各種免許状など久松家に直接関連あるものが多いが、「大御番頭諸絵図」や「火事急事官府要覧」「式日着服覧」などの役儀向の覚帳の類が数点含まれている。また「下屋敷図面」は奥庭の部分をカブセ絵図にしたもので、小図面ながら旗本の屋敷図として参考になるところが大きい。（現蔵者は別掲に同じ。全二三点。一二リール七

七九コマ）

⑥ 京都柏原家文書

初代が寛永年中から京都において小間物、呉服を営んだとされる柏原家は屋号を柏屋と称し（世襲名は孫左衛門）、天和・貞享の間に江戸本町四丁目に進出し、早い頃には主として小間物・呉服問屋として十組の内店組に属しているが、逐次経営を拡大して、取扱商品も木綿を営業の中心におき、塗物・紙・蠟燭に及んでいる。

同家に襲蔵されるこれら営業関係の史料のうち、その大宗をなすものは、もちろん、いわゆる江戸店持、京商人としてその営業実績を示す支店たる江戸の各販売店からの京都本店に対する年一季の勘定報告書類であり、それを受けた本締仕入店たる本店の決算書類である。今年度は経費の関係上、享保一五―明治二年の京本店分と、安永四―明治三年の日本橋通意丁目塗物店（黒江屋太兵衛名義）の決算書類を収録した。他に寛保元年十二月の条目をはじめとする家法・店則類及び本店居宅の拡張を跡づける京都の沽券状各数点を追加してある。収録フィルム二五

リール、一二、六三六コマ（史料所蔵者、京都市東山区問屋町通り五条下路西橋町洛東遺芳館）

⑦ 長野県南佐久郡佐久町旧海瀬村引継文書

本文書は今年度刊行「史料館所蔵史料目録」第二十四集収録の信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文書の関連史料の一つであり、明治期の市町村制施行によって合併成立した海瀬村が引き継いだ海瀬三カ村―上海瀬村・下海瀬村・海瀬新田村の近世文書である。上海瀬村は主として田野口藩・奥殿藩（大給松平氏）領であるが、下海瀬村と海瀬新田村は天領であり用水・川除、入会、助郷など共同の關係にあり、これらの文書は相互に補完しあうものが多い。

このうち下海瀬村には本文書と、土屋家文書、それに相馬昭夫氏所蔵で来年度当館に寄託される相馬家文書の三つの史料群、合計一万点に及ぶ村方文書が現存していることになる。

今回は所有者佐久町当局の御好意で当館に借り上げ撮影を行なった。大量の故取り敢えず冊子類の一部を収録し、残余は引き続き来年度に撮影を予定している。

内容は、上下海瀬村の延宝四年水帳ほか田畑改帳をはじめ、下海瀬村の条目諸書・議定書、免状、貯穀帳簿、上海瀬村の五人組帳、宗門人別帳、年貢割付帳、小入用帳、公用日記、触書請印帳、諸願書類、海瀬新田村の宗門人別帳、荒地起返・川除普請関係の文書などで、近世後期のものが多い。(現蔵者 長野県南佐久郡佐久町。収録点数三七〇冊、二〇リール＝二三、三二二コマ)

集 報

○昭和四九年度事業(その二)

一、史料の収集

「備中国松山板倉文書」(大名)および「信濃国津久松家文書」(旗本)、計二件の寄託を受けたほか、「幕府右筆蛸川家文書」、「上総国埴生郡立木村高橋家文書」、「京都柏原家文書」、「長野県南佐久郡佐久町旧海瀬村引継文書」、「信濃国津久松家文書」の五件についてマイクロフィルムによる収集を行なった。(詳細別項新収史料紹介(四頁以下)参照)。

二、定期刊行物の発行(予定)

- 1、「史料館所蔵史料目録」第二十四集に、「信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文書」(名主)約五、〇〇〇点を収録
- 2、「史料館研究紀要」第八号

収録論文は次のとおり。

史料紹介「奈良茂家」考 鶴岡実枝子
背負梯子の諸形態 中村俊亀智
福岡日雇・大坂通日雇万屋喜平
次について 藤村潤一郎

3、「史料館報」第二十二号(本号)

三、要覧「史料館案内」の発行

当館利用者のための「史料館要覧」は所蔵史料の一覧など、幸いご好評をうけていたが、これまでのものは一九六九年版であるため、内容が現状にそぐわない面が多くなった。改訂は新組織の完成後にいう予定であったが、建築の延期などの事情により、今回「史料館案内」と題名をかえ、新組織やその後の収蔵史料など改訂増補して一九七五年版を発行した。

四、本年度第二次史料所在調査の実施

第一次の旗本設楽氏三州代官滝川家文書(愛知県新城市出沢)にひきつづき、第二次調査として、京都府立丹後郷土資料館(京都府宮津市国分)のご協力を得て、加悦町算所西原家文書(縮緬織元・問屋)、伊根町漁業組合共有文書(漁村)浅茂川機業組合所蔵文書(織元)等、計九件の文書について現地調査を行ない、目録を作成した。史料所蔵者各位はじめ、担当の増田信武・百田昌夫、同館関係者各位のご協力に心から謝意を表する。なお、本年度右二次にわたる調査の概要については別掲(六―七頁)を参照されたい。

お知らせ

新改築の計画進行状況と

史料の閲覧利用について

改組にともなう新改築の建設工事については、本誌でもたびたび予告をしてまいりましたが、ご存知のような公共投資の抑制などとも関連して、今四九年度はついに少しの変化もなく終りました。

来年度については、一昨年新築した東館の西隣に建設を予定している館のうち、まず、地下の機械室部分の工事が実施される見通しだといわれています。この場合には、工事による騒音など環境上の条件に若干の影響はあると思いますが、史料の閲覧は従来どおりできます。西館の地上部分に着工することにより、一部の史料が閲覧できなくなることになれば、その時になるべく早くお知らせいたします。

なお、史料目録作成のための整理作業の都合上、来年度中の閲覧利用を停止する文書は、本年度から継続の「信濃国松代真田家文書」のほか「常陸国藤代宿横瀬家文書」と「美濃国高田町千秋家文書」の合計三件の文書となりますので、よろしくご了承ください。

閲覧業務停止のお知らせ

書庫内煙蒸の実施にともない、左記の期間の閲覧業務を停止する予定です。すのでお知らせいたします。

五月三十一日(土) から六月四日(水) まで

第二十一回(昭和五〇年度)近世史料取扱講習会の実施予定について

今のところ左記のことが内定しています。詳細は確定次第、地方公共団体・大学等を通じて連絡いたします。

第一会場 金沢市 九月

第二会場 東京都 一〇月

史料館報 第二二号

昭和五〇年三月三十一日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ六ノ三

国文学研究資料館内

国立史料館

電話(七八三) 九一〇六代

印刷所 三恵出版印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町一ノ二

電話(二六一) 一四四三番